

令和 7 年 2 月

大学院文学研究科

丁 文 静 提 出 学 位 申 請 論 文 (課 程 博 士)

『現代日本語における
格助詞性複合辞に関する研究』

審査報告書

國 學 院 大 學

丁 文静 提出 学位申請論文（課程博士）

『現代日本語における格助詞性複合辞に関する研究』 審査要旨

論文内容の要旨

本論文は、現代日本語における格助詞性複合辞について、日本語学習者の習得、使い分けの理解を深めるべく文章語資料と会話資料とにわたって使用実態を調査して分析・考察を加えた研究である。本論文は第1章、第1部6章、第2部1章、第3部1章、終章の全10章によって構成されている。

第1章では、本論文の背景、目的、先行研究、構成について述べている。

第1部「文章語資料における格助詞性複合辞の使用実態」は、第2章「学術論文における格助詞性複合辞の使用状況に関する考察」、第3章「ビジネス文書における格助詞性複合辞の使用状況に関する考察」、第4章「企業年次報告書における格助詞性複合格助詞の使用状況に関する考察」、第5章「法律条文における格助詞性複合辞の連体用法に関する考察」、第6章「BCCWJにおける格助詞性複合辞「からすると」「からすれば」の相違に関する考察」、第7章「経済小説における格助詞性複合辞の使用状況に関する考察」の6章で構成されている。第2章では、母語話者によって書かれた学術論文における格助詞性複合辞の使用実態について調査し、使用率は『日本語教育』が0.82%、『國學院雑誌』が0.82%であるのに対して、『日本語の研究』は0.67%であり、また異なり語数

は『日本語教育』『國學院雑誌』がともに 11 であり、『日本語の研究』が 10 であると指摘している。第 3 章では、5 冊のビジネス文書文例集を調査して格助詞性複合辞の普通形が延べ 2662 語、丁寧形が延べ 639 語用いられており、社内文書と社外文書はいずれも「について」「につきまして」が最も使用されている一方、社交文書では「をもって」「をもちまして」の方が多く使用されていると指摘している。また、全体的に普通形の頻度は丁寧形よりも圧倒的に高いが、「に際して」「によると」の丁寧形は普通形よりも多く使用されていることが特徴的であるとしている。第 4 章では、AR (TOPIX ニューインデックスシリーズで公表された企業の年次報告書) と BCCWJ (現代書き言葉均衡コーパス) の産業に所収のデータを対象として格助詞性複合辞を調査し、異なり語数は 12 社の AR で 14 語、BCCWJ の産業で 10 語であると指摘している。第 5 章では、格助詞性複合辞「についての」「に関する」「に対する」の前にはいずれも具体的な内容が多く見られるが、「に関する」「に対する」は文をより明確に表現することができるため法律のような物事を厳格に明示することが必要な公的な文で使われやすいと指摘している。第 6 章では、BCCWJ によって調査すると、格助詞性複合辞「からすると」は「からすれば」よりも、経験に基づいた話し手の確信を強めた話し言葉に使われるため特定目的の「知恵袋」の「相談・交渉」との相性がよく、「国会会議録」は国会の答弁の場では聞き手を納得させるように客観的な述べ方が求められるため「からすれば」が多く使用されるなどの指摘をしている。第 7 章では、ビジネスの現場における実際の会話に準ずる

資料としてビジネス会話を反映する経済小説『7つの会議』『破戒者たち』を取り上げて会話文・書簡文・地の文を調査し、会話文・地の文ともに出現する「として」「にとって」「について」「に対して」「との」「という」「によって」を中心に考察している。また、「については」「にとっては」の融合形「についちゃ」「にとっちゃ」などは見られないが「という」のより口語的な「っていう」は見られることを指摘している。

第2部「会話資料における格助詞性複合辞の使用実態」は、第8章「話し言葉データにおける格助詞性複合辞の使用状況―座談会・インタビュー・講演録を利用して―」の1章である。第8章では、会話資料として学術雑誌に所収の座談会・インタビュー・講演録を調査して、格助詞性複合辞の出現率は『國學院雑誌』の座談会・インタビューには「について」が最も多く出現し、『國學院雑誌』の座談会と『言語文化教育研究』には「によって」が最も多く見られ、「にあって」「からすれば」は座談会に特徴的に見られ、「に際して」は『國學院雑誌』の講演録、「から見ると」は『國學院雑誌』のインタビューに特徴的に見られるなどの指摘をしている。また、学術的な座談会に用いられる日本語は発言者・編集者によって文として整えられた可能性があり、話し言葉の実態そのものを反映する資料ではないが、しかしながら学習者にとっては学術的でしかも理解しやすい話し言葉の資料として有効であるとも指摘している。

第3部「対照研究の視点から見た格助詞性複合辞」は第9章「対象を示す格助詞性複合辞とそれに対応する中国語表現―日中対訳コーパスを利用して―」の1章である。第9章では、日中論文コーパスを用いて日

本語の対象を表す格助詞性複合辞とそれらに対応する中国語表現とを対照言語学的に分析して、格助詞性複合辞は意味的には中国語の介詞と類似しているが、語彙的には1対1の対応関係ではなく1つの同じ介詞が2つ以上の複合助詞に対応する場合があるとする。「動作の対象」を示す際には日本語では「に対して」「について」「に関して」「に向けて」のいずれも使用可能で、これらに対応する中国語は“对”“对于”“针对”“给”“向”が見られ、「に対して」「について」「に関して」はいずれも中国語の“对”“对于”“针对”に対応し得るが、「に対して」は対象との対立関係や働きかけの方向性を強調する傾向がある一方で「に関して」「について」は働きかける対象の範囲や内容に焦点を当てる傾向が見られると指摘している。

第10章では本研究の成果をまとめ、今後の課題を述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語非母語の学習者にとって上級レベルに達しても使いこなすことの難しい現代語における格助詞性複合辞について、日本語上級学習者が論文執筆や口頭発表・議論・質問などフォーマルな場面に対応できるような文法知識を習得するための指導法に資するべく文章語資料と会話資料にわたって使用実態を解明しており、日本語学および日本語教育のために有益な貢献をする研究として高く評価することができる。

第1章では、本論文の背景、目的、先行研究について述べているが、

章末の「参考資料」と「参考文献」の違いについて再考することが望まれる。

第1部では、文章語資料における格助詞性複合辞の使用実態について、学術論文、ビジネス文書、企業の年次報告書、法律条文等を調査して解明しており、上級の日本語学習者にとって現実的で有益な情報が示されている。このうち第2章では、『國學院雑誌』『日本語の研究』『日本語教育』の三誌における母語話者の執筆した学術論文における格助詞性複合辞の使用実態を調査しており、論文の執筆を目指す学習者にとってまさに実践的な情報が示されていると評価することができる。雑誌間で格助詞性複合辞の使用状況にさほど大きな差がない中で『日本語教育』の上位に見られる「にとって」「を通して」が『日本語の研究』では上位に見られないという指摘は興味深いが、論文の分野によってはありうる傾向であろう。執筆者の好みが文体・語彙に及ぼす影響なのか学会の相違なのかも考慮に入れて考察してもよいのではないと思われる。学習者の専攻分野が経済や理系など多岐に亘ることを考慮して今後は専門日本語研究の分野の研究を参照して理系など比較すべき学術雑誌の分野を選択することを期待する。また、「から見て」などを複合辞と判断するか除外するか基準として本動詞であるか否か、どのような原理によるのかについては慎重な判断が求められる問題である。漢字表記とかな表記の違いに言及しているが、これはこの章だけでなく本論文全体を通しての考察を加えることが望ましい。第3章では、ビジネス文書文例集における格助詞性複合辞の使用実態を普通形と丁寧形に分けて分析してお

り、敬語表現が多い日本語ビジネス文書の特徴が解明されている点が評価できる。ただし、係り先の位置について分析することが有効であるかどうか慎重に判断した上で記述すべきである。また、「ヒエラルキー」という用語を用いているが、身分階層を論ずる研究と紛らわしく、敬語の研究においては「敬度」を用いるのが一般的なので改めた方がよいと思われる。また、「頻率」という用語は日本語で論文を書くときには使用しないので、留意すべきである。さらに、「分野別複合辞の使用高頻度上位 10 語」の表のように複数の先行研究の結果を併せて示す場合には個々のデータの典拠を個々に明記して正確を期すことが望ましい。第 4 章では、ビジネス文書とは別に日本語学習者が日本の企業に関わる経済活動に従事する際に接する可能性のある企業の年次報告書と BCCWJ の産業に所収のデータを対象とした分析であり、特に格助詞性複合辞の使用状況とともに漢字表記を調査したところに特色がある。用例に掲げる「裏付けを持って」の「持って」は本動詞であるのか否か、また、「その対価をもって」を抽象的意味を持つ前接語、「本取引の完了をもって」を具体的意味を持つ前接語と判断する基準について論旨も含めて再考を要する課題であろう。先行研究についても本論文との関わりを充分踏まえて掲げることが望まれる。第 5 章では、法律条文における格助詞性複合辞の連体用法「についての」「に関する」「に対する」を取り上げて考察するにあたり、冒頭で「「に対しての」「に対する」「に対した」の 3 つは文法上、ほぼ同一視されている」と記述しているが、「に対しての」については先行研究の当否を充分吟味した上で再考することが望まれ

る。また、「についての」の「の」があることによる「主観評価が含まれる」という指摘も根拠があるのかどうかについても再考の余地がある。第6章では、「からすると」と「からすれば」について前接する語彙、ジャンルとの関係について考察しているが、「まとめ」で掲げている前接する語彙の傾向について、「観点」も「立場」も「からすると」と「からすれば」の両方があるので、出現率に僅かな違いがあるとはいえ、「からすると」は「こと」との共起が著しいとして「からすれば」は「様々な行為や様態を受ける」とするまとめ方よりも、むしろ話題の重さ軽さや改まりの観点で捉え直す余地もあるのではないと思われる。第7章では、経済小説における格助詞性複合辞の使用状況を調査しており、第1部に含めてはいるが、寧ろ第2部の会話資料の1つとして、いかにも会社での会話で用いられる「ご意見はご意見として承っておきます」やより口語的な「っていう」などのビジネス会話における実態を解明したところに価値を認めることができる。

第2部では、会話資料を対象としており、第8章では、音声をより忠実に文字化した資料における実態調査のための言語資料としては資料価値が劣るとして使用されない学術雑誌の座談会・インタビュー・講演録を、敢えて発言者・編集者によって学術的内容を話し言葉でしかも意味の通る文に整えているため学習者にとって有効な資料としての価値を見出して格助詞性複合辞の使用実態を分析したところに意義が認められる。ただし、すべての格助詞性複合辞を調査するよりは、丁寧形が見られる格助詞性複合辞に絞った観点も意義があるのではないと思われる。

第3部では日中対照研究の観点から格助詞性複合辞を検討し、第9章では日中論文抜粋コーパスを使用して分析を加えており、中国語母語話者に対する日本語教育に有益な成果を得ているが、「に対して」の「対比」の例は異質なので配置に工夫することが望ましい。

第10章で今後の展望が述べられているが、本論文全体を通じて、文章語資料と会話資料に亘る現代語の格助詞性複合辞の研究は特に資料面で従来にない成果を得ており、これを踏まえた今後の発展を大いに期待することができる。

本論文は以上のように再考を要すべき点も含まれるが、それ以上に10章に亘って現代日本語における格助詞性複合辞を書き言葉と話し言葉との双方について詳細に調査し、実証的に考察を加えた研究であり、日本語教育にも資するところの大きい研究として高く評価することができる。

よって、本論文の提出者、丁文静は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

令和7年2月17日

主査	國學院大學教授	諸星美智直	㊞
副査	國學院大學教授	菊地 康人	㊞
副査	國學院大學教授	小田 勝	㊞